

『本日は、お日柄もよく』これは、原田マハさんの小説のタイトルである。どのようにしたら人の心を打つ話ができるか。教員でなくても誰でもが考えるこの問題に、この作品は多くのヒントを与えてくれる。単にスピーチ力向上のノウハウのみならず、生きていく上での知恵を学ぶことができる。

原田さんの作品はどれもユーモア溢れる軽妙なタッチで描かれ、気楽な気持ちで楽しく読むことができる。いまのご時勢には、ちょっとした息抜きになるかもしれない。また、この作品では、私たちが日頃使う「言葉」が主題となっており、登場人物の発言には学ぶべき点が多い。

私は、今年の4月9日の朝まで悩んでいた。それは、入学式での校長式辞を原稿を見ずに話すか、従来通り原稿を読む形にするかである。実は、以前から人前で話すときに、どうするのが一番いいのか、ずっと考えていた。原稿を読むのが一番よくないことはわかっている。だが、入学式や卒業式の校長式辞では、格好つけながら原稿を読んでいったほうが、雰囲気が出るというか風格が出るというか、その場に合うような気もする。

令和2年度は、原稿を見ないで話すという自分なりのめあてを考えていた。コロナ禍もあり、入学式の時間短縮を図るために、校長式辞の原稿を短くしたところである。これならば、原稿なしでもいけそうである。そんなことを考えていた。しかしである。過去の経験から、原稿を用意し、それを頭に入れ、思い出すように話すと、どうもうまくいかないということもわかっていた。波に乗れないのである。

数日間の葛藤があった。結局、入学式では従来通り原稿を見ながら話すことにした。その結果、令和2年度のめあては変更されることとなった。では、新たなめあてをどうしたか。そもそも生徒が集まる機会が少なくなった。始業式も終業式も放送である。そこで内容勝負にした。短いながらも生徒の心に少しでも残るフレーズ、言葉を吟味することにした。

スピーチというと、紋切り型で退屈というイメージもある。校長先生の話というと、まずは長いというイメージがある。ところが、『本日は、お日柄もよく』を読んでいくと、工夫次第でスピーチはいくらでも面白くなることを学ぶことができる。

作品には、スピーチの大基本として「静」が出てくる。一般にスピーチといえば情熱や強さが求められるというイメージがあるだけに、「静」というキーワードは意外である。これは聴衆が静かになるまで待つということにとどまらず、スピーチをする本人の心も静かでなくてはならない。自分の中の深い静けさの中から湧き上がる言葉を伝えてこそ、人を感動させることができるという意味ではないかと思う。

また、作品には、「披露宴のスピーチは、メモを読まない」ということも出てくる。スピーチとは、自分の心を相手の心につなげるものであるから、いくら流暢でもただ読んでいるだけの原稿では相手の心には届かない。自分の中から湧いてくる言葉がいかに大切かを教えられる。

「人間にとって一番大切な言葉を、小学校四年生の子どもが理解できるような言葉で話すのが一番の名文」という文豪、志賀直哉の言葉が思い起こされる。